アジア史２レポート

# 歴史認識と『南の島に雪が降る』

03K030　久志田　渉

『南の島に雪が降る』は俳優・加東大介(1911～1975)が、自身のニューギニア・マノクワリでの特異な戦争体験を記した著作であり、加東自身の主演でドラマ化(小野田勇脚色・NHK)・映画化(笠原良三脚色・久松静司監督・東宝)された他、文藝春秋第20回読者賞を獲得している。この作品には衛生伍長として出征した前進座の俳優・加東(本名・加藤徳之助、当時の芸名市川莚司)が軍の指令によって、精神が荒廃した兵士の情操を豊かにする目的で設立された演劇分隊を指揮し、元・歌手や浪曲師などの座員と共に無から舞台を創り上げ、明日の命も知れない生活と飢餓・病に苦しむ兵士たちに生き甲斐を与えた経験が描かれている。私がこの作品の存在を知ったのは加東氏主演の映画作品を観たコトがきっかけだったが、戦場での過酷な日常と日本から遠く離れた地で、孤独の中、命を落としていく兵士達の無念さと、そんな中でも演劇を通して生きる喜びを得ようとする彼らの姿が胸に沁みた。

この作品の中で、マノクワリに駐屯した兵士たちは幸運にも一度として戦闘に巻き込まれず、従ってそれにそれに伴う残虐な行為を犯すコトなく終戦を迎えている。また慰安所が設けられていなかった(慰安婦を乗せてマクノワリに向かっていた軍艦が潜水艦によって撃沈されたため)コトもあって、彼らの性的な汚点も記されていない。読者はただ加東の感性豊かな文章表現に酔い、人間味豊かな兵士たちが理不尽な戦場での苦しみの中、協力し合って生き抜いて行く姿に感動するコトができる。もっとも加東自身、決して声高に戦争を批判している訳ではないが、文章の其処彼処から戦争の愚かさ、その非人間性が伝わっては来る。しかし、この作品の落とし穴は彼らが戦闘を経験せずに済んでしまったため、あまりに兵士たちが魅力的に、私たち一般人と大差なく描写されてしまった点にあるのではないだろうか？この本だけを読んでいれば、日本軍は過酷なニューギニアのジャングルで、明日の希望もなく過ごし、舞台に舞う紙の雪に故郷の風景や肉親を思いながら死んでいった「被害者」として捉えられてしまう。彼らはアジア各国にとって「加害者」であり、このマノクワリの兵士たちさえも、環境によっては残虐な殺傷行為を「国家」の名の下で強制されてしまうかもしれないのだ。そのコトを見逃すと、彼らが単なる「受難の人」のように思えてしまうだろうし、これこそがこの作品の最大の問題点である。

作品中に福岡出身の兵士・篠原竜照という人物が登場する。無精ひげ覆われた怪僧・竜照は進んで悪役や難役を引き受け、演劇分隊を支えるムードメーカーとして描かれているが、彼の孫が『ゴーマニズム宣言』で知られる漫画家・小林よしのりだったコトがこの作品を良くも悪くも若い世代に知らせる結果につながった。小林の著作であり、賛否を巻き起こした『戦争論』の一章を割いて、彼は『南の島に雪が降る』を紹介している。小林にとっては竜照は、幼い頃の彼を慈しんで育ててくれた大切な祖父であり、彼は祖父について「わしの祖父は二度召集令

状が来て二度戦地へ行った　一度も逃げなかった　すごいと思う」*(以下、引用『戦争論』第5章「南の島に雪が降る」より)と、その戦争体験を評している。小林は、戦争イコール悪という価値観から祖父や祖父の戦友たちの名誉を守らねばならぬとし、戦争を批判しかつての日本軍による戦場での行為を否定する人たちを「犬猫なみのケモノ」と切り捨てる。彼にとっては、「かつての戦争を否定する＝自分の国・親族を否定する」という論理が成り立つのだろう。さらに彼は論を飛躍させ、「人は個人を超えねばならぬ時がある　愛する人のため　家族のため　多くの人々のため　国のため　戦わねばならぬ時がある」と主張し、戦争に伴う残虐行為さえも「勇ましい武勲」として称えよと叫ぶ。小林にとって「国家」や「血族」は絶対であり、「戦争」さえも国の威信をかけた壮大な国策であるようだ。

確かに彼が言うように、人間誰しも自分につながる人々の「汚点」を知るコトには抵抗を感じるだろう。私自身、父方の祖母の半生について調査した時には、祖父の戦争経験について聞いている。その時に思ったのは、「祖父が戦場で人殺しやレイプをしていたらどうしよう」という不安感だった。もし自分の親族が戦場で非道を働いたとしたら、私は自分自身をも呪ってしまうだろう。幸いにして軍属の郵便局員として出征した祖父は、一度も戦闘に巻き込まれるコトなく終戦を迎えた。そのコトを知った時の安堵は大きかったし、自分の祖父を好き好んで貶める人間などいないだろう。しかし、私の慕う祖父や先人達が戦場で「殺人」や「強姦」を犯していたとしたら、どうだろう。私は、とても小林のように「大好きな祖父がした行為を責めるのではない！それはお国の戦った勇ましい武勲だ！！」などと称えるコトはできない。それよりもまず、自分の愛する人々を「殺人者」「強姦魔」にしてしまった「国家」や「戦争」を憎むだろう。戦争責任を追及する人々は、小林の言うように先人を貶め、責任を押し付けているのではない。人間を鬼畜に変えてしまう「国家」と「戦争」を弾劾しているのである。小林の信じる「国家のための戦争」という聞こえのいいフレーズの暗部には、人間がケモノと化してしまう地獄絵図が存在しているのだ。

作家・草森紳一は「報国の写真　不許可写真論」という文章の中で、周囲の大人たちから戦場での「慰安所」や「強姦」についての経験を中学生の頃に聞かされた記憶を記している。戦場での性的な非道を、被害者への罪悪感も無しに子供に伝えるという行為に、私は強烈な嫌悪感を覚えた。また、評論家・保坂正康は、ある戦友会について取材した際に、会合の出席者が「あの時、チャンコロを何人殺した」などと語る姿を目撃したという。戦後なおも兵士たちの中には、かつての戦争に対する反省の意識を持たない者が存在している。その一方では、戦場での行為がトラウマとなって残り、中国人の子供を何人も撃ち殺した記憶から、自分の孫が抱けなかったり、死期が迫ったときにいきなりベッドに土下座して謝り出すなど、精神に癒えるコトのない傷を負わされた元・兵士もいる。人間をここまで深く傷つけ、時に醜い怪物に変えてしまうのは「国家」であり「戦争」である。小林が称えるような勇ましい武勲も、輝かしい戦績も実際の戦場には存在しないのだ。何で国民が「国家」の為に人を殺し、筆舌に尽くせない苦しみを背負い続けなければならないのか？小林は「国家」を信奉し、自分の祖父を愛するあまり「国家」へ責任を追及するという視点がスッポリと抜けているのだ。

「南の島に……」を例にとってみても、そこには軍隊や戦争の非人間性が加東の抑えた筆致

によってしっかりと記録されている。全く同じ編成の船団を二組用意し、どちらかがマノクワリに到着すればいい(一方は撃沈してもかまやしない)という軍部の輸送計画。以前敗退した経験を持つが故に内地への帰還が許されず、ジャングルの奥地へ最低の物資と共に送り込まれてジワジワと飢餓とマラリアで死滅させられた「ワルバミ農場隊」(小林もこの部隊を『戦争論』に登場させているが、彼らが軍部に抹殺されたコトには一切触れていない。ただ、彼らがジャングル奥地から命がけで演劇分隊の公演を観に来たとだけ記しているが、日本軍の冷酷さを隠すために、彼は意図してこの部隊の悲劇を記載しなかったのか？)。マノクワリの部隊一万人を杜撰な計画でジャングル奥地へ進軍させ、その結果大部分が死亡した「ニューギニア死の行軍」を指示しておきながら、自分はサッサと軍幹部と共に内地へ帰っていった某将官……。そもそも、日本に家族や仕事を残してニューギニアに派遣され、碌な食料も与えられず、芝居だけを楽しみに死んでいった兵士たちの悲しみや無念の思いに対して、誰が責任を取るというのだ。小林はこれでもなお「国家のために個人を超えて勇敢に戦った英雄」と彼らを呼ぶのか？彼らがそんな風に称えられて本当に喜ぶと思っているのだろうか？

『南の島に……』は小林が言うような感動的な日本軍の戦記ではない。「国家」が「戦争」さえ起こさなければ、彼ら兵士たちは遠い南の島で望郷の念に駆られながら命を落とす必要などなかった。彼らだけではない、数え切れない兵士に殺人や強姦を犯させたのは「国家」なのだ。小林は「祖父たちを貶めるな」と叫ぶが、彼らを鬼畜にまで貶めたのは小林の愛する「国家」ではないか。「国家のために戦ったのだから、彼らは素晴らしい」と後世の人間が語るコトは、実際に戦場で死んでいった兵士・民衆・女性・子供に対する冒涜である。誰が好き好んで、人を殺し自分の命を国のために捧げるだろうか？小林の言う「個人を超えねばならぬ時」とは、「国家」が国民への責任を逃れるための詭弁としか私には思えない。あまりに小林は、戦争に対する想像力が欠如しているのではないか。彼は『戦争論』の参考文献として多くの本を提示しているが、その後ろに「以上、ナナメ読み、ひろい読み、ツマミ読みを含む、試験前の一夜漬け、ヤマ当て読書の要領で」(『戦争論』pp.380-381)と記し、その中には『南の島に……』まで含まれているのだ。こんないい加減な史料への態度と歴史認識で、戦争について記すコトが許されていい筈はない。彼は気付いていないだろうが、戦争で戦った先人達を貶めているのは、無責任に戦争を美化し、人間の命を鴻毛のように考える小林自身である。この本によって歴史観を歪められた若者は多いし、彼らが純粋に国家を信じて死んでしまうような事態になったとしたら小林はどう責任を取るのか？多くの戦中派の人々は、戦争中若者を無責任に操り、国家に命を捧げるコトを「美徳」と教え込んだ「当時の大人たち」への怒りを記している。小林の存在は、そうした大人の再来のように私には思えてならない。とんでもない「ハーメルンの笛吹き」だ。笛吹き本人は決して徴兵されるコトはない。死ぬのは彼に踊らされた若者たちなのだ。

『南の島に……』という一冊の本を好戦的に読むのも反戦的に読むのもその人それぞれの自由だが、この本を通して加東氏が伝えたかったのは、ニューギニアで死んでいった多くの兵士たちの無念と、彼らを理不尽に死なせた戦争の残酷さであるコトを忘れてはいけない。その根幹を忘れてこの本を読んでしまえば、再び彼らのような苦難を味わう世代が生まれるかもしれない。戦場で命を落とした人々は、決して子孫が自分たちと同じ運命を辿るコトを喜びはしな

いはずだ。私たちはかつての歴史に思いを巡らす時、どこまでも慎重に事実を見極めると同時に、その時代を生きたあらゆる立場の人々の悲しみ、痛みを想像できるだけの感受性をもたなければならないのではないか？それが歴史を学び、かつての過ちを繰り返さないために、若い世代が守らなければならない責任であると私は思う。

参考文献

加東大介『南の島に雪が降る』光文社、2004。
沢村貞子『私の浅草』新潮社文庫、1987。
沢村貞子『貝のうた』新潮社文庫、2000。
沢村貞子『老いの楽しみ』岩波書店、2000。
小林よしのり『戦争論』幻冬社、1998。
宮台真司他『戦争論妄想論』教育史料出版会、1999。
保坂正康「兵士たちの精神的傷跡から靖国問題を考える」『世界』2004年９月号。
草森紳一「報国の写真　不許可写真論」『秘蔵の不許可写真』毎日新聞社、1998。

(レポート指導教員　松本ますみ)